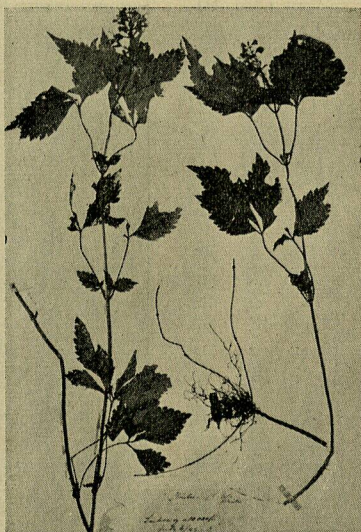


第三十圖 「おほしまさう」、フーカー卿がシキム。
ヒマヤハ八〇〇—一〇〇〇尺の個所にて
採集せる原腊葉でキュー植物園腊葉室に珍藏
さる (原圖)



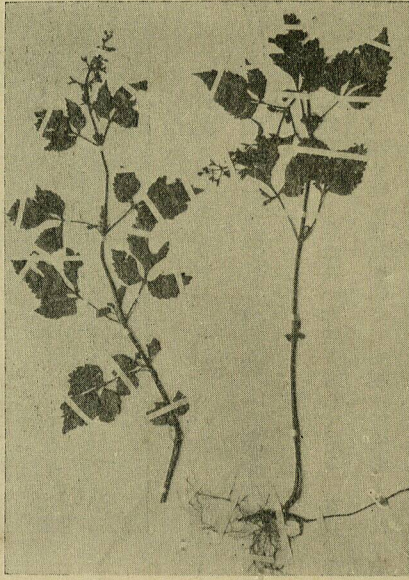
然るに一昨年鈴木重良氏が能高で発見された。分類學上から見ても、植物地理學上から見ても實に面白い植物である。和名は臺北帝國大學理農學部長農學博士大島金太郎氏の名譽の爲め余の附名せるものである。

形態 多年生草本で、莖は長い匍枝を有して居る、直立、單一で僅に軟毛を疎生する。葉は全體で六—九糎、葉柄を備へ、三個の小葉からなる。頂小葉は菱狀卵形で、先端は銳尖形、基部は楔狀に漸尖する、左右のものは狭くて基部は著しく不齊である、縁邊に鋸齒があり、局部重鋸齒の所もある、上面は淡綠色、下面は少しく淡色、兩面に微小なる毛がある。總狀花序は短く、少數の花を着く、苞は線狀鉞形で、小花梗と等長であるか少しく短い、萼は倒圓錐形、明に兩唇形をなし、上唇は三裂、其中央裂片は著しく小さ

植物學上珍らしい臺灣植物

「おほしまさう」(Rubiteueris palmata Kido) 此種類は初めフーカー卿 (J. D. Hooker) によつてシキム・ヒマヤハ八千尺乃至一萬尺の間にて採集せられ唇形科の専門家ベンサム (Benham) により Tenuium palmatum と手記せるものを、フーカー卿は其儘『大英印度植物誌』に發表せられたものである。これが支那の雲南省及び湖北省の八千尺乃至一萬一千尺の所にも発見せられた。余は英國キュー植物園で、是等のタイプを研究し、當然新屬であるから前記の屬名を、『臺北帝國大學理農學部紀要』に發表した。但しベンサムは屬に疑があつた爲め發表しなかつたものと思はれる。

臺灣の植物

第三十一圖 「おほしまさう」、臺中州能高・尾ノ上間
産（原圖）

い、下唇は二裂し、其裂片は稍、披針形である、果時著しく増大する。花冠は外面に微軟細毛を生じ兩唇形で上唇は二淺裂し其裂片は卵狀三角形である。下唇は三淺裂し、兩側裂片は卵狀三角形、中央裂片は長橢圓狀卵形で先端は少しく壑狀である。雄蓋は四個、花盤は等形。花柱は先端二裂し、其裂片は絨狀である、上位の裂片が著しく長い。小堅果は殆ど球形で栗褐色、光澤があり、平滑で少しく皺紋がある。

「*Paulownia fortunei* Hemsl. 異

名 *Campsis fortunei* Seemann (1867) = *Paulow-*

nia Mikado Ito (1912) 明治四十三年三月川上瀧彌氏

南投に於て採集した花、及び同年八月川上瀧彌及び寺内又男兩氏が同所に於て採りたる果實から、明治四十五年理學博士伊藤篤太郎氏が新種として學界に發表し、「このへぎり」と云ふ和名を命じた。然るに一九一七年ハーバード大學のウィルソンは前記支那産と同種なりと認めた。但し臺灣では珍らしい植物たるを失はない。又臺灣總督府文官の帽子の徽章はこの花を模したと云ふ。

形態 落葉の喬木で高さ十數間、直徑三―四尺に達するものがあり、廣卵形の壯大なる樹冠を形成する。樹皮は老樹では不規則な

深き凹凸が出来る。葉は長い葉柄を有し、長い心臟形又は卵狀心臟形で、先端は長く銳尖し、基部著しく心臟形、兩側は圓い、縁邊は全縁で僅に鈍波形を呈する、上面は平滑で光澤があり、下面は白味を帶び稍、突出せる主脈及び側脈等に密軟細毛を生ず、長さ二

二種、幅一四糎程ある、葉柄は丸く長さ九糎程ある。圓錐花序は頂生し、一〇―二五個の花を着け、側枝は二―三花を着け、花梗は太くして平滑である。花は大形で葇菜色又は淡紫色で、黄色の暈があり、内面には紫斑があり、長さ六―九糎ある。萼は倒卵形、糠の様な綿毛を生じ、五裂し、其裂片は三角形鈍頭である。花冠は「きり」より長くして細い、唇部五裂し其裂片の三個は稍大きく圓形で不規則な牙齒があり他の二個は稍々小さい。兩葎は其高さ花冠の半、花糸は平滑である。蒴は木化し、長橢圓形又は長橢圓狀橢圓形、先端は銳形、平滑で皺紋があり、縦に溝がある、長さ四―五糎程ある、四裂する。種子は多數、長橢圓形、種皮は翼となり、翼には條線がある。臺灣では南投地方に多い。支那の廣東省に分布する。

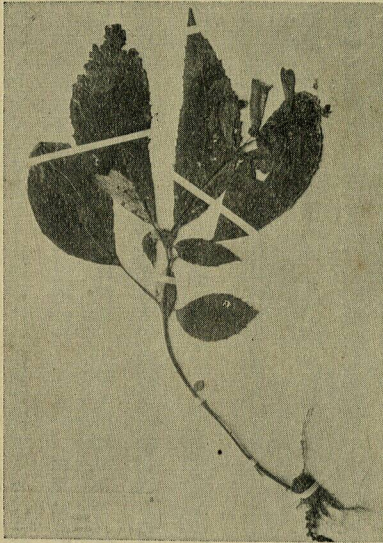
「にひたかしほがま」 [*Pedicularis transmorrisonensis Hayata*] 典型的な臺灣特産の可憐な高山植物である。森丑之助氏により新高山に於て發見せられ、一九一五年、新種として發表せられたものである。

形態 多年生草本で花時高さ二〇糎に達し、花後花序著しく伸長し基部は木化する。莖は傾上し、軟毛を生ず。葉は四個輪生し、長さ一・五糎に達す、有柄、全形卵狀長橢圓形で、羽狀に深裂し、其裂片は五―七對ある。稍々三角形で先端は銳形、縁邊に鋸齒がある、上面は疎に下面は密に卷縮狀軟毛を生ず。輪生聚繖花序は少數の花を附着し、相接近して頭狀花叢をなす、苞は下部のものは葉と同じく上部のものは漸次小形となる。萼は橢圓狀筒形、卷縮毛を生じ、先端に五個の牙齒があり、一五個の脈がある。花冠は萼より約四倍程長い、筒形だが上部は漸次幅廣くなる。唇部は兩唇形で上唇は帽子形、下唇は淺三裂し其裂片は殆ど圓形に近い。雄葎は四個二強、上唇内に包まれ、花糸は下部に軟毛がある。子房は平滑、花柱は長く、柱頭は分裂しない。蒴果は萼より長く卵狀披針形、長さ約一・一糎ある。種子は橢圓形で平滑、黒色、長さ一・五糎ある。産地は新高山・南湖大山・大霸尖山・能高山等の九千尺乃至一萬尺の間に生ずる。

「チタノトリクム」 [*Titanotrichum Oldhami Solereder* (Sept. 1909). 異名 *Rehmannia*? *Oldhami Hemsl.* (1890) = *Matsumuria Oldhami Hemsl.* (Dec. 1909)] この植物は臺灣固有の屬に屬する學術上興味深

ものである。初め一八八九年英人ヘムズレーにより倫敦『リンネ學會會報』第二十卷にオルダム（淡水）及びハンコック（金包里及び八芝蘭間）の採集品により *Behannania?* *Oldhami* と云ふ名稱で發表せられたものであるが、其後十九年を経て、二人の植物學者が獨立にこれが新屬であると云ふ結論に達した。即ち獨人ズルレータは一九〇九年九月發行の『獨逸植物學會會報』に *Titanotrichum* と云ふ名稱のもとに發表し、英人ヘムズレーは同年十月の『キニー報告』に *Matsunuria* と云ふ名稱のもとに發表した。特に後者は故松村任三博士の學界の功績を記念せんが爲後に附したものであるが、其發表が二個月遅れた爲め採用の出来ないのは残念である。

第三十二圖 「まつむらさう」、花蓮港鹽桐里産（原圖）



形態 草本、高さ三〇糎餘りて、基部は木化して居る。莖は單一、

彎曲斜上し、褐色で白色の軟細毛を生じて居る。葉は有柄、對生殆ど對生又は下部のものは互生することがある、卵形、倒卵形又は長橢圓狀披針形で兩端に向ひ銳形又は銳尖形、縁邊に不齊なる疎牙齒あり、膜質、上面は綠色、下面は淡色、兩面に稍、硬き小鬚毛を生ず、長さ一五糎に達する。總狀花序は一〇—一三個許りの花を着け、線狀披針形の小苞を生じ、花梗は細く小苞と殆ど等長、花は黄色長さ三・五—四糎。萼に鬚毛を生じ、不規則に五深裂し、其裂片は線狀披針形である。花冠は鐘狀筒形、下部近く縊れ、基部距狀である、唇部は兩唇形で五淺裂し、其裂片は圓形である。雄蕊は四個、蒴は二個づゝ、相接近する。子房に軟毛を生じ、一室で二個の胎座に多数の卵子がある。蒴は卵形、萼内にあり、胞背的に二裂し、其裂片は更に二分する。種子は極めて微小で翼がある。島内では大屯山・草山・角板山・羅東池ノ端・新竹新埔・嘉義交力坪・桐里・臺東タロコ及び紅頭嶼

に産する。

「かはかみうすゆき」(*Leontopodium microphyllum Hayata*) 歐洲アルプスの「エーデルワイス」に相當する典型的の可憐な高山植物で、臺灣特有のものである。一九〇六年十月川上瀧彌・森丑之助兩氏が新高山登山の時一萬二千尺の所で初めて採集したものである。學名は小さい葉と云ふ意味であるが、和名は川上瀧彌氏を記念したものである。

第三十三圖 「かはかみうすゆきさう」、能高山産 (原圖)



形態 多年生の草本で、莖は細く、長く匍匐し、極めて細き根を生じ、側枝は傾上し、單一で、高さ五―六糎程ある。中部及び上部には葉を密生して居る。葉は極めて小形で、無柄、線狀筒形、先端は圓形、縁邊は全縁、長さ七―一〇糎、幅二糎ある、兩面に密氈毛を生じ、下面は灰白色を呈する。頭狀花序は小形で莖の先端に附着し、其周圍は五―六個の葉が苞狀に圍んで居る、この葉は特に毛が深く、水平に開出して居る。總苞は鐘形で、苞は二列に覆瓦様をなして居り、内輪のものは狭く先端に綿毛を密生し、外輪のものは廣く背面に綿毛を生じて居る。花托は凸形、殆ど頸狀苞がない。内に兩性花と雌花とがある。雌花の花冠は極めて細く、先端は截形、兩性花の花冠は筒狀で、上部は少しく擴がり先端は五裂して居る。葯は基部箭形、花柱は先端少しく二裂して居る。瘦果は小形、長橢圓形で平滑。冠毛の毛耳は基部で

相癒合して居り、上向せる刺を生じて居る。臺灣では新高山・能高山・菩萊主南峰・南湖大山及び大霸尖山等に産する。

植物學上珍らしい臺灣植物

參考書

臺灣植物の載つて居る主なるものを舉げ一般的のものは舉げない。

東京植物學雜誌。

臺灣博物學會會報。

Annals of Botany.

Annales des Sciences Naturelles.

Berichte der Deutschen Botanischen Gesellschaft.

Botanische Jahrbücher für Systematik, Pflanzengeschichte und Pflanzengeographie.

Bulletin de l'Herbier Boissier.

Bulletin of Miscellaneous Information, Royal Botanic Gardens, Kew.

Curtis's Botanical Magazine.

Gardeners' Chronicle.

Hooker's Icones Plantarum.

Icones Plantarum Koisikavenses.

Journal of the Arnold Arboretum.

Journal of Botany.

Journal of the Linnaean Society of London, Botany.

Mélanges Biologiques.

Repertorium Novarum Specierum Regni Vegetabilis



「フナツシ」の臺灣植物との關係のあらわし

- Candolle, A. L. P. de, & Candolle, A. C. de: *Prodromus systematis naturalis regni vegetabilis*. 17 vols. Paris (1824-73).
- ” : *Monographiae phanerogamarum prodromi nunc continuatio nunc revisio*. 1-9. Paris (1878-93).
- Engler, A.: *Das Pflanzenreich (Regni vegetabilis conspectus)*, 1-96 (1900-28).
- Honda, M.: *Monographia Faecarum Japonicarum, Bambusoideis exclusis*. Jour. Fac. Sc. Imp. Univ. Tokyo, Sect. III, 3, part 1 (1930).
- Koidzumi, G.: *Conspectus Rosacearum Japonicarum*. Jour. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo, 34, Art 2 (1913).
- Kudo, Y.: *Labiatarum Sino-Japonicarum Prodrromus*. Mem. Fac. Sc. & Agr. Taihoku Imp. Univ., 2, pt 2 (1929).
- Kunth, C. S.: *Enumeratio plantarum omnium hucusque cognitarum, etc.* 5 vols. Stuttgartiae (1833-50).
- Nakai, T.: *Tentamen Systematis Caprifoliacearum Japonicarum*. Jour. Coll. Sc. Imp. Univ., 42, Art 2 (1921).
- Schlechter, R.: *Orchideologie Sino-Japonicae Prodrromus*. Redde, Repert. Sp. Nov. Beihette, 4 (1919).
- 臺灣植物の自然圖誌
- Forbes, B., et Hensley, W. B.: *Enumeration of all the plants known from China proper, Formosa, Hainan, the Corea, the Luchu Archipelago*. Jour. Linn. Soc. Bot., 23 (1886-8); 26 (1889-1902); 36 (1903-5).
- Hayata B.: *Compositae Formosanae*. Jour. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo, 18, Art 8 (1904).
- ” : *Flora Montana Formosae*. Jour. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo, 35, Art 19 (1908).
- ” : *Materials for a Flora of Formosa*. Jour. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo, 30, Art 1 (1911).
- ” : *Icones Plantarum Formosarum, 1-10*. Taihoku (1911-21).
- ” : *Botanical Survey by the Government of Formosa, with Short Sketches on the Vegetation of the Island*. Act



臺灣の植物

III^{me} Congr. Intern. Bot. Bruxelles, 2 (1911), pp. 61-82, pls. (12-32).

Henry, A.: A List of Plants from Formosa. Trans. Asiatic Soc. Jap., 24 (1896), Suppl.

Kudo, Y.: Materials for a Flora of Formosa, I-II. Jour. Soc. Trop. Agr., 2 (1930).

Matsumura, J. et Hayata, B.: Enumeratio Plantarum Formosanarum. Jour. Coll. Sc., Imp. Univ. Tokyo, 22 (1906).

Masamune, G.: Contribution to our knowledge of the Flora of the Southern Part of Japan, I-III. Jour. Soc. Trop.

Agr., 2 (1930).

Wilson, E. H.: A Phytogeographical Sketch of the Ligneous Flora of Formosa. Jour. Arn. Arb., 2 (1920), 25-41.

Yamamoto, Y.: Supplementa Iconum Plantarum Formosanarum, 1-4. Taihoku (1926-8).

伊藤武夫、臺灣植物圖說。(昭和二年)。

〃 續臺灣植物圖說。(昭和三年)。

〃 臺灣高山植物圖說。(昭和四年)。

金平亮三、臺灣樹木誌。臺北(大正七年)。

川上瀧彌、臺灣植物目錄。臺北(明治四十三年)。

牧野富太郎、根本完爾、日本植物總覽。東京(大正十四年)。

松村任三、帝國植物名鑑。東京。上卷(明治三十七年)、下卷前編(明治三十八年)、下卷後編(明治四十五年)。

中井宗三、臺灣林木誌。臺北(大正三年)。

佐々木舜一、新高山嶽森林植物帶論。臺灣總督府中央研究所林業部報告、一號(大正十一年)。

〃 臺灣植物名彙。臺北(昭和三年)。

〃 林業部腊葉館目錄。臺北(昭和五年)。